

個人對話の教育價值

— 保育の實際 —

倉 橋 惣 三

おはなしの教育價值に就ては知らないものはない。幼兒教育の方法の中でも、最主要なもの一つとして、誰れでも、之れを重視し、また苦心する。しかも、その所謂おはなしは、先生がして子どもが聴くお話である。話し手と聴き手とは、はじめから分けてあるお話である。そればかりか、そのおはなしは其の話しの始まらない前から出來て居るもので、それを先生が子どもの前に持ち出して來るのである。

そこで、どんなものを持ち出して來るか（おはなしの選擇）とういふ風に持ち出すか（おはなしの技術）といふことが大切でもあり六かしくもある問題になる。そして、その兩方がうまくいつた時に、保育の方法としてのおはなしの價值が發揮せられて來る。其の選擇は用意であり、技術は工夫である。つまり、用意と工夫とで、おはなしが子どもに與へられるのである。その用意したものを持つて、その工夫したしかたによつて、いざとばかり、子どもの前に立つのが、先生のおはなしである。

ところが、斯うした、いはゞ多少開き直つたおはなしのほかに、先生と子どもとは、いつといふこともなく、何といふ

ともなく、どちらからといふこともなく、おはなしを交換する。えへんと咳ばらひをして始める譯でもなく、しいんとして必ずしも耳をそばだてる譯でもないから、おはなしをして居るか居ないかも、恐らく多くの場合心づかずに居る位のであるが、これがなか／＼教育上意味の多いことである。あの豫め用意を以てせられるおはなしに、必ずしも敢て劣らない教育價值をもつものである。そしてまた、なんでもないことの様で相當に六かしいことでもある。あの細かい工夫を以てせられるおはなしの六かしさにも、決してまけない六かしさのあるものである。

さて此種の會話をなぜ個人對話といふか。聞き手話し手が分れないで、徹頭徹尾、あひ對のことだから對話といふのはいゝとして、特に個人といふのは何故か。なにも一人對一人のシングルゲームに限らず、先生對、とりかこむ數人の子ども、先生も亦、數人といふ様な場合がいくらもある。それを特に個人對話とは何故いふのか。そこには一寸考へて置くに値する意味がある。

あのおはなしといふものでも、聞き手一人といふことはいくらかもある。しかし、大抵は多勢に聽かせるのを普通として、さて現に聽いて居るものが多勢でも一人でも、おはなし其のものに大した變りはない。話し方には自然多少の違ひがあるけれども、一人に聽かせる桃太郎、多勢に聽かせる桃太郎といふ差別があらう筈はない。之れは、聞き手の數に何の關係がないといふよりも、聞き手の有無さへも、桃太郎のおはなしの存在には無關係なことだと言つた方がいゝのである。つまり、桃太郎といふおはなしは、話し手、聞き手の間に取扱はれる前に、一つの童話として存在して居るのであるだから假りに一人の聞き手に話して居る時でも、個人童話などといふことはない。

しかるに、對話の場合に於ては、その相手が一人と一人とである場合は勿論のこととして、人數は多勢が居るにしても、話そのものは個人性のものとして行はれるのである。便利上、皆さん、皆さんは皆さんのといふ様な言ひ方のせられる時も、其の話のねらひは一人々々へ向けられ、或は、一人々々で受けとめて居るといつていゝのである。そうでないと、

此の心持ちが徹底しないと、折角くの對話が演説になつて仕舞ふ。對話はおはなしとも違ふが、演説とも違ふ。演説は諸君よと、群集に説く、對話は、どこまでも、一人々々へ話しかける。そして、一人々々からの受けこたえを俟つ。

そんな譯で、個人對話と名をつけることにするが、實は、名をつけたりすると、其の一番大事な特色、即ち純自然的といふことを損じ易い心配もある。此の名はいはゞ、ありとも知らぬものを空氣と呼ぶ様なもので、平生は忘れて居た方がいゝ。さあ太郎さん、これから個人對話を始めませうなどと言はないことにして下さい。太郎さんが驚くばかりでなく、個人對話そのものが面くらつて仕舞ふから。

二

個人對話の教育價値は、數へて見れば随分澤山あるが、その中で一番中心なものは、人間性教育の意味に於て、したしみの教育の出来ることである。之れは、之れ以上説明を要しない程、分りいゝことと思ふが、私の茲にいふのは、個人對話によつて、其の先生と其の子どもとの親しみが出来るといふことのほかに、(此の事自身が非常に有意義なことであるが)人にしたしむ心そのものを幼児に養ひ得るといふ、一般的教育効果をも考へたいのである。

幼児教育に於て、親しみの心を養ふの必要なることは言ふまでもないが、その方法とでもいふものがあるとすれば、つまり、親しみの経験をさせるといふことに他ならない。勿論、親しみは人間の本性の一つで、外から養ふといふべきものではないが、打ちすてゝ置いては、内部の本性も充分に育たないことがある。而して、内にあるものを育てるには、之れが適當に外にあらはれて、人性が人生の事實となる機會を與へなければならぬ。此の機會が與へられないと、性はあつても、内に閉ぢこもり、時には、多少萎びて仕舞ふことを免れなかつたりする。又時には、折角くの美しい強い本性が、適當に外にあらはれて其の自然の満足を得られないために、妙に、こじれた、いはゞ變態的のものにならんとも限らない。

勿論、他の方面からいへば、したしみは心の内の事實である。外にあらはるゝ、外からの満足などいふことは淺いことに過ぎない。そういふ傾向が多くなると、あらはれ易いが淺いものになるといふ心配も言はれる。一應理のあることは相違ない。したしみ、したしみと言つて、椋のぬけた桶の様になど、あらはれ易い情の持ちぬしになることの、誠にくだらないことは言ふを俟たぬ。容易には漏れ出でぬが、出づれば澄み透つて居る岩の眞清水の様なしたしみが貴いことも言を俟たぬ。しかも、たゞ、いたづらに閉ぢこめて、こじれた心になるかも知れないことは、子どもの心の正しい發達として、何より憂ふべきことである、こういう意味に於て、したしみの教育の一つの仕事は、心の内の親しみが外に、あらはれ、また、外からの親しみが受け入れられる公道をつくつてやることである。個人對話は、その心と心との間のみちをあける一つの方法である。

次に、もう一つの大きい價値は、此の個人對話によつて、個人的に心のはたらきをすゝめ、促し、導き得ることである。子どもの心の口を、あんと上に向かせて、上から物でも押し込む様に教へ込むことの、眞に心のはたらきを鍊る所以でないことは言ふまでもない。と同時に、子どもの心を、自學々々と、たゞ稻子のやうに跳ねさせて、それだけで、心のはたらきの完い養ひの少しも出来ないことも言ふまでもない。どちらにしても、子どもの心の教育は、もつと親切なことでなくては出来ない。丁度擊劍の腕を磨くのと同様に、先生が相手をして、撃たせて見たり、受けて見たり、撃ち込んで見たり、受けさせて見たり、その間に、腕のはたらきが進歩する様にしむけてやるのでなくては出来ない。個人對話は、たとへば少し向きが違ふが、心のはたらきを鍊つてやる、心の仕合ひである。

よく先生のおはなしは聴く子であるが、先生とお話の出来ない子がある。その責大抵は先生の方にあるを常とするが、子どもとしては、心の無精な子どもである。先生には話したが。しかし、自分ひとりしやべることを知つて居て、人の話をじつと聞くことの出来ない子どもがある。之れ亦、其の責、大凡そ先生にあるが、子どもとしては、心の落ちつかぬ

い子どもである。共に、此のまゝでは、心の進歩の上に非常な損なところに居る。直してやらなければいけない。

勿論、子どもに、直ぐに、あの話好きの隠居さんの様になれといふことは無理だ。無理であるのみならず無用だ。無用であるのみならず、時に急激だ。老人のは、時によると、話題の内容には興味はなくて、たゞ、そうした話のやりとりの間に、ハ、ア、ナル程、いやどうもその、ですかね、斯うも考へられますね、つまり言ひ方次第ですな、御尤もくを楽しんで居ることがある。之れは對話を弄して居るのであつて、茶味はあつても人生味はない。子どもは、そんな不真剣な話はない話より事實だ。事實の興味がつゞく限りの對話だ。そこで、老人の様に對話を味つてるといふ様なことはない。其の問題の事實興味が盡きれば、さつさと中止もすれば、勝手な結論へ飛躍もする。話してる傍へ犬でも來れば直ぐ其の方へ飛んでゆく。ちつくりと、老人同志いつまでも茶をのみ煙管をいちくつて面白がつて居るといふ様な風の對話を、子どもに要求したら、子どもの眞性を害することになる。おばあさん子が、冬季炬燵大學で仕込まれて、いやに、理屈つぽいこまつしやくれた口振りをする、小隠居さんになつたりするのは、其の例である。

しかし、之れを以て、個人對話の教育價値をすてゝはならない。殊に達道の大師範になれば、廊下や、庭の立話で、電車の中の十分二十分で、すつかり、見事に、活きた心のはたらかせ方が養ひ得ないものでもない。